

今、このアートに“夢中”です。

ギャラリーの空間が“数”に浮かれる、宮島達男の新作。

細川周平 評論家



サッカーにも夢中……!?

ほくはデジタルだのサイバーだのには文学であれアートであれ全然興味がなく、ほんと、何も知らないんです。ことにそうしたトレンドに後乗りしてきた連中の安っぽさには我慢ならない、という義憤の人なんです。アートでも絵具が泥山のように塗り重ねられたのが好きです。描きたいものがまぶあって、という人が好きで戦略的にどうのこうのと考え売れ線からねらって、という画商タイプ頭のいい画家には関心ありません。好きな現代画家？ ライナー・アルヌルフとかラッセル・ミルズとか。去年だったかヴェネツィア・ビエンナーレの宮島達男の作品の紹介を見てから妙にこの人のことが気になっていましたが、神田のギャラリー・サージで初めて実際に作品を見ることができました。不思議なこと、その日うちに帰ると、名古屋のギャラリーたかぎという知らない画廊から、頼みもし

ないのに宮島の新作展のカタログが届いていて、偶然の一致に心が弾みました。

そのインスタレーションは小さなスペースの白い壁に大小さまざまなデジタル時計的な黒い数字がインレタやら絵具やらで描かれていうというもので、なんちゅうこともない、のですが、よくみるとゴミみたいに小さな数字があったり、壁の凹凸のおかげで数字が歪んで見えたり、その隅っこに自分のサインがあったり、といろいろなかかけもあるのです。名古屋のカタログに載っていた作品はダイオードとICを使って同じ大きさのいろいろな数字がめまぐるしく変わり偶発的に並ぶというシリーズなのですが、このインスタレーションは数値は一定だが大きさにバラエティーがあり、空間全体がいわば数に浮かれている感じなのです。

目かくし将棋ってありますね。

2人でコマの位置を数字でいって想像力の盤でゲームするのですが、あの時って頭の中が全部将棋盤の格子になってしまいます。このインスタレーションも、別に大量の数に囲まれているわけではないのですが、数の国の希薄さが快いで

すね。数は厳密な道具だけどそれが行き過ぎるとユーモラスになってしまふんです。数とは間である、なんて東洋趣味を考えてくすくす笑ってしまいました。

ピーター・グリーナウェイの「数に溺れて」という数遊びの映画を思い出しました。水と数がキーという変なミステリーで、数字の一つ一つは別に何の象徴とかいうわけではなく、それが数である、ということに意味がある、という「高級な」遊び映画でした。このインスタレーションも同じようなレベルでの数の遊びという印象を強く受けました。巷のデジタル感覚とは一線を画していますね。

●ほそかわしゅうへい。音楽評論家。大竹伸朗の「裏見返しの美学」がすごい、最新刊「サッカー狂い」(哲学書房)が話題。現代美術よりも現代サッカーが好き、というが。



「a digital counting machine」(1988年)。通常は電子機器のパーツを使った作品が多い。